

柏崎市 ひきこもりに関する実態調査

報 告 書

令和7（2025）年11月

柏崎市福祉保健部 健康推進課 ひきこもり支援センター

## 調査概要

### 1. 調査の目的

柏崎市内のひきこもり状態にある方の実態を把握し、今後のひきこもり支援に反映させるため。

### 2. 調査対象

15～64 歳までの以下①、②いずれかに該当する方を調査の対象とした。

- ① 仕事や学校に行かず、家族以外の人とほとんど交流せずに、自宅にひきこもっている状態の方
- ② 仕事や学校には行かず、時々買物など外出することはあるが、家族以外の人と交流がない方

### 3. 調査方法

柏崎市内の民生委員・児童委員及び市内地域包括支援センター、居宅介護支援事業所並びに小規模多機能型居宅介護事業所（介護サービス事業所等）に協力を依頼し、自身の担当地域に該当する者がいるか、また、その該当者の生活状況等について確認した。

調査では、該当者の外出状況や支援の有無、ひきこもりに至った経緯や年齢、ひきこもり状態にある期間、本人と家族が困っていること等を尋ねた。

なお、民生委員・児童委員、介護サービス事業所等それぞれに回答いただいたため、該当者は重複している可能性がある。

### 4. 調査期間

令和 6 (2024) 年 1 0 月

### 5. 回収結果

回答数	197 名 (民生委員 159 名、介護サービス事業所等 38 名 (26 事業所))
アンケート回収率 (民生委員)	76. 8% (民生委員 207 名)
該当者が「いる」と回答	73 名 (回答全体の 36. 9%)
該当者の数	125 名

# 集 計 結 果

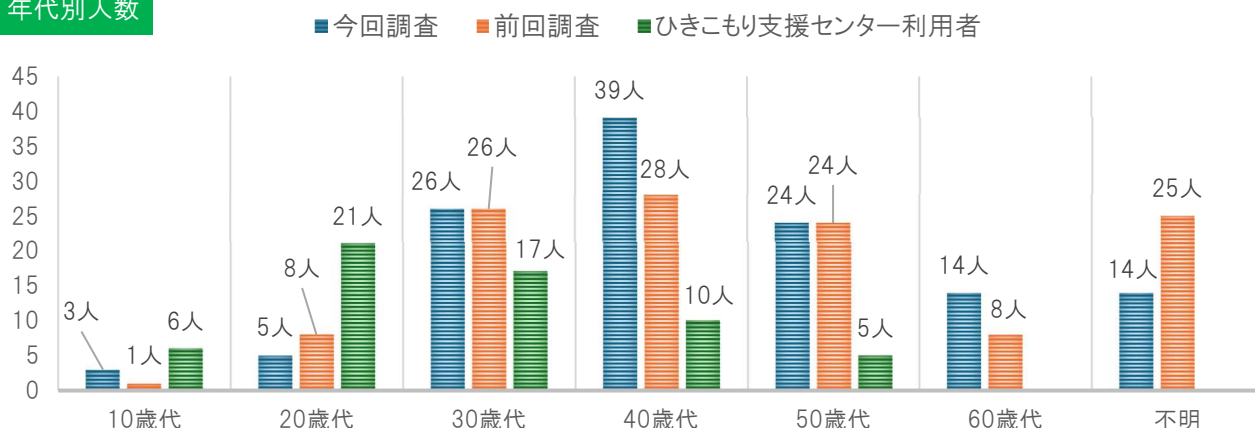
## 1. 該当者の年代別割合と男女比

今回の調査で回答のあった該当者の数は125名であり、令和3（2021）年度調査と比較すると5人増加している。年代でいうと40歳代の割合が最も高く、次に30歳代、50歳代の割合が高くなっており、前回調査と同様の傾向がみられた。

当センターの利用者（令和5（2023）年度）は20歳代が最も多く、10歳代から30歳代までの割合が74.6%と4分の3を占めている。

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	不明	計
今回調査	3人(2.4%)	5人(4.0%)	26人(20.8%)	39人(31.2%)	24人(19.2%)	14人(11.2%)	14人(11.2%)	125人
前回調査	1人(0.8%)	8人(6.7%)	26人(21.7%)	28人(23.3%)	24人(20.0%)	8人(6.7%)	25人(20.8%)	120人
利用者	6人(10.2%)	21人(35.6%)	17人(28.8%)	10人(16.9%)	5人(8.5%)	0人	0人	59人

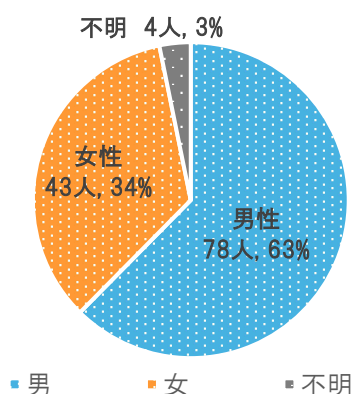
年代別人数



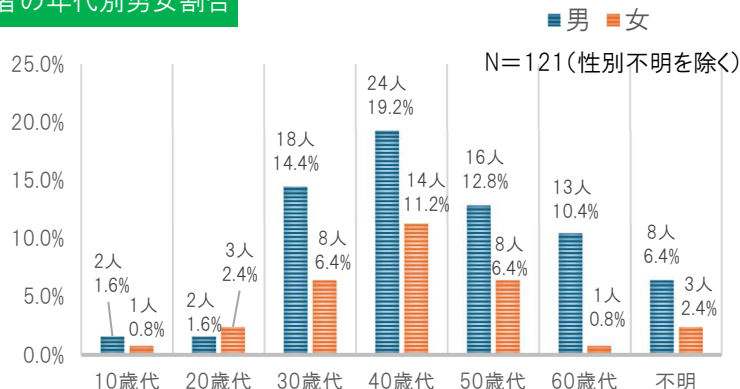
該当者の性別割合は、男性が78人、女性が43人となっており、男性の人数が多くなっており、前回同様の結果であった。

当センターの利用者の性別割合も同様で、男性（41人：69.5%）が女性（18人：30.5%）より多くなっている。男女別の年代ごとの割合を比べてみると、40歳代の男性が24人と最も多く、全体の約2割を占めていた。

該当者の男女比



該当者の年代別男女割合



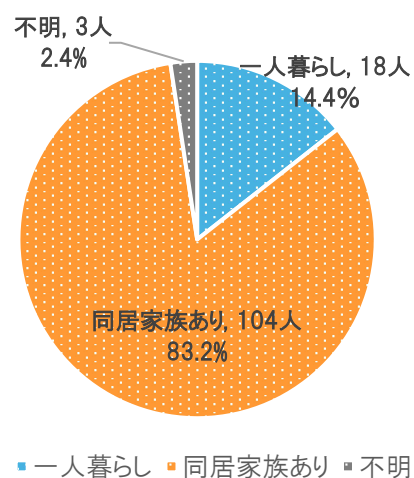
## 2. 該当者の家族状況

全体の 83.2%にあたる 104 人の該当者が家族と同居している状態であった。

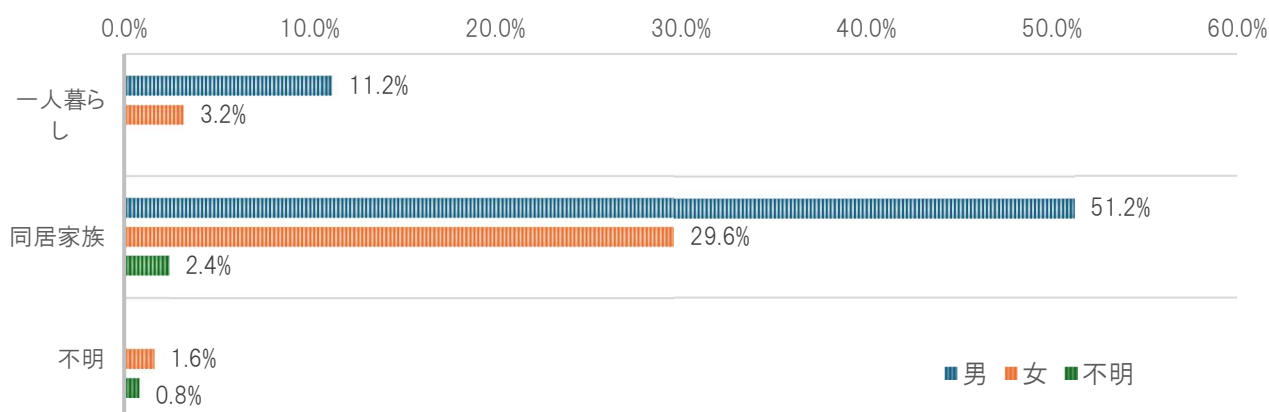
同居家族がいる人のうち、両親と同居は 47 人（母と同居が 80 人、父と同居が 61 人）であった。

一人暮らしをしている該当者は 18 人と少なかった。

また、家族状況を男女比で見ると、該当者の中で一人暮らしをしている割合は、男性と比べて女性のほうが少ないことが分かった。



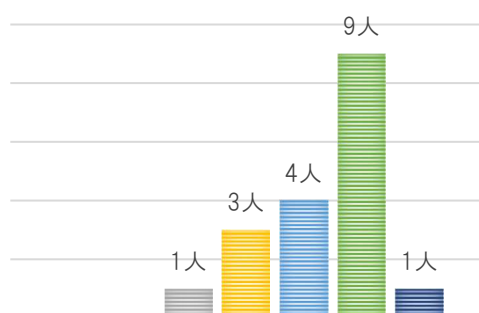
### 家族状況における男女比



家族と同居している人は男性・女性ともに、年代的に 40 歳代、30 歳代、50 歳代の順に多かった。一人暮らしは 60 歳代 9 人、50 歳代 4 人と年代の高い層が多く、親の高齢化や死亡により単身生活に移行したものと推測される。

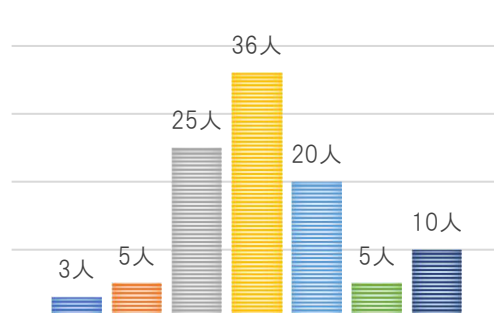
### 一人暮らし 男性 14 女性 4

■ 10歳代 ■ 20歳代 ■ 30歳代 ■ 40歳代  
■ 50歳代 ■ 60歳代 ■ 不明

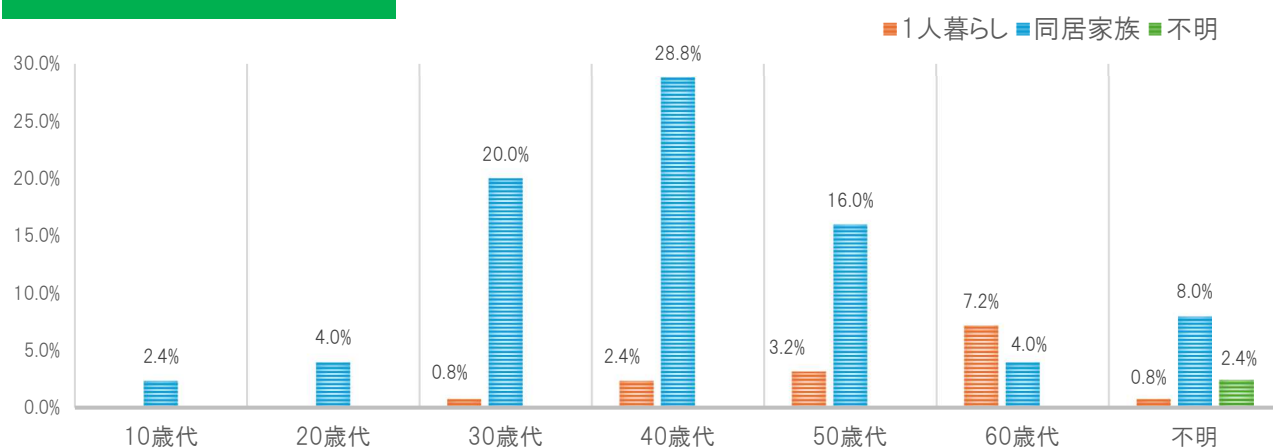


### 同居家族 男性 64 女性 37

■ 10歳代 ■ 20歳代 ■ 30歳代 ■ 40歳代  
■ 50歳代 ■ 60歳代 ■ 不明



# 各家族状況における年代割合



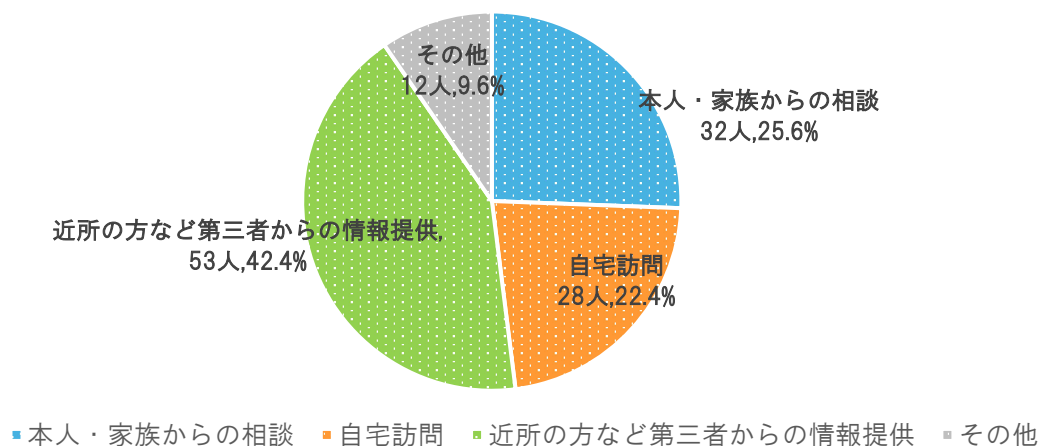
		合計	一人暮らし	同居家族あり	不明
全体		125	18	104	3
性別	男性	78	14	64	0
	女性	43	4	37	2
	不明	4	0	3	1
年齢階級別	10 歳代	3	0	3	0
	20 歳代	5	0	5	0
	30 歳代	26	1	25	0
	40 歳代	39	3	36	0
	50 歳代	24	4	20	0
	60 歳代	14	9	5	0
	不明	14	1	10	3

### 3. 該当者を知ったきっかけ

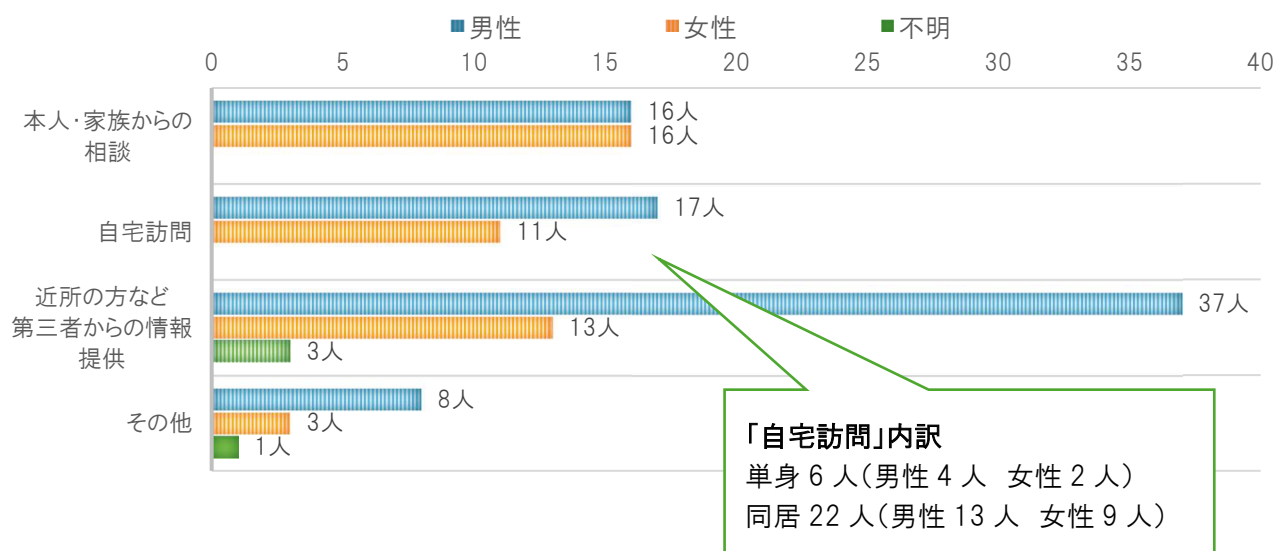
「第三者からの情報提供」で該当者の存在を知ったというケースが 42.4%と最も多かった。

前回調査では、「本人、家族からの相談」をきっかけに把握したケースは 9.2%であったが、今回 25.6%と増加している。

「その他」の内容としては、地域包括支援センターからの情報提供、近所に住んでいるため、前任からの引継ぎ等があった。

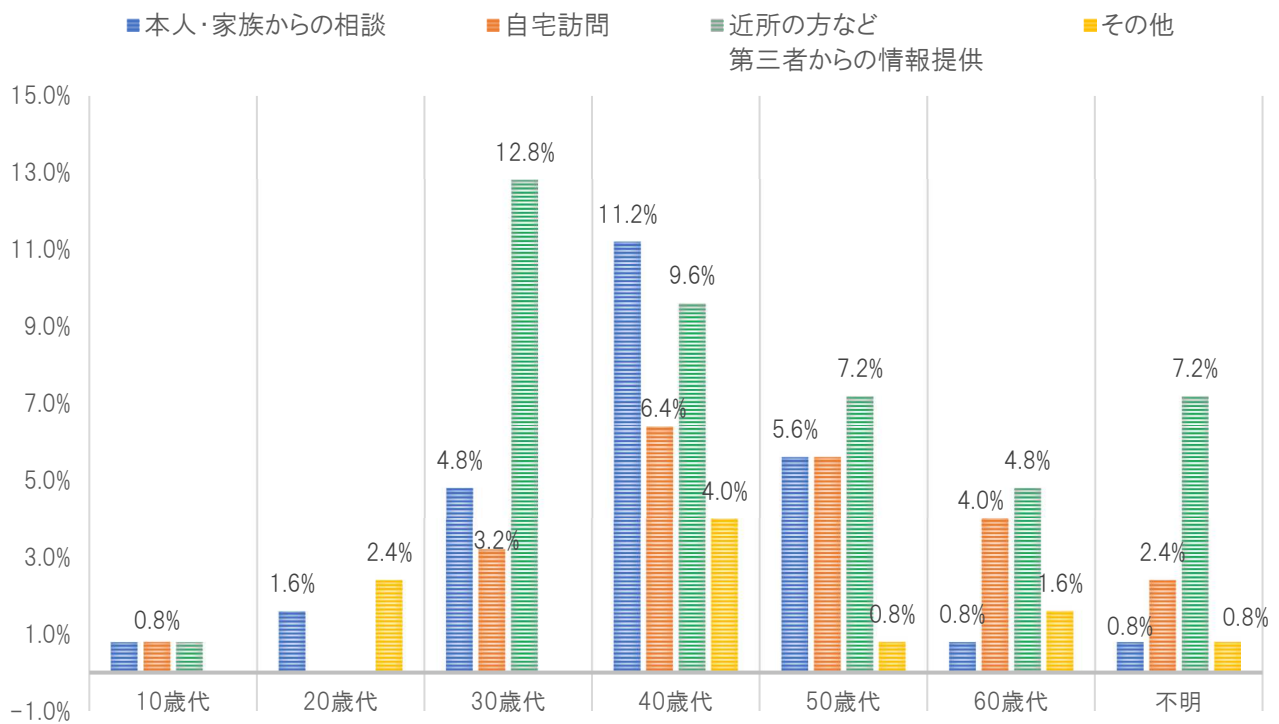


#### 該当者を知ったきっかけ（男女比）



本人・家族からの相談は男女ともに偏りはないが、近所の方など第三者からの情報提供では、圧倒的に男性が多い。30～50 歳代の生産年齢世代(15 歳～64 歳)の男性が働かず家にいると注視されてしまうためと考えられる。

### 該当者を知ったきっかけ（年代割合）



家族・本人からの相談は 40 歳代、50 歳代が多く、同居している家族（親）が高齢になり、今後（親亡き後）を心配してようやく相談につながったものと考えられる。

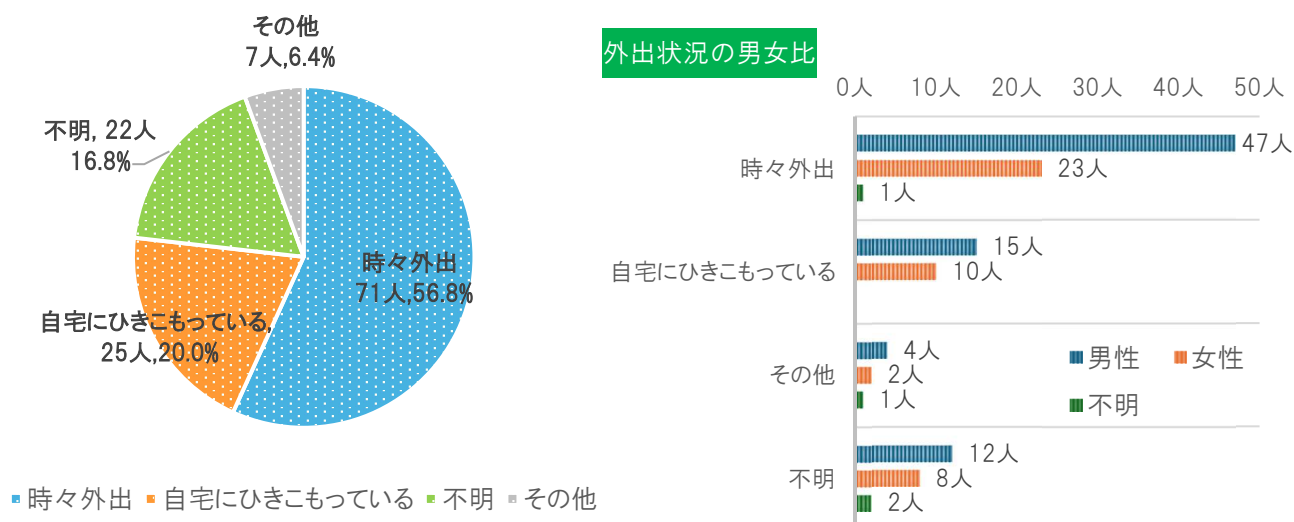
		合計	本人・家族から	自宅訪問	第三者から	その他
全体		125	32	28	53	12
性別	男性	78	16	17	37	8
	女性	43	16	11	13	3
	不明	4	0	0	3	1
家族状況	一人暮らし	18	0	6	9	3
	同居家族あり	104	32	22	41	9
	不明	3	0	0	3	0
年齢階級別	10 歳代	3	1	1	1	0
	20 歳代	5	2	0	0	3
	30 歳代	26	6	4	16	0
	40 歳代	39	14	8	12	5
	50 歳代	24	7	7	9	1
	60 歳代	14	1	5	6	2
	不明	14	1	3	9	1

## 4. 該当者の外出状況

該当者の約半数が、買い物程度の外出をしている状況であった。

外出がなく、自宅にひきこもっている状態にある方は該当者の2割にあたる25人であった。

その他では、家族の受診の送迎をしている、家族の面会に行っているといった回答があった。

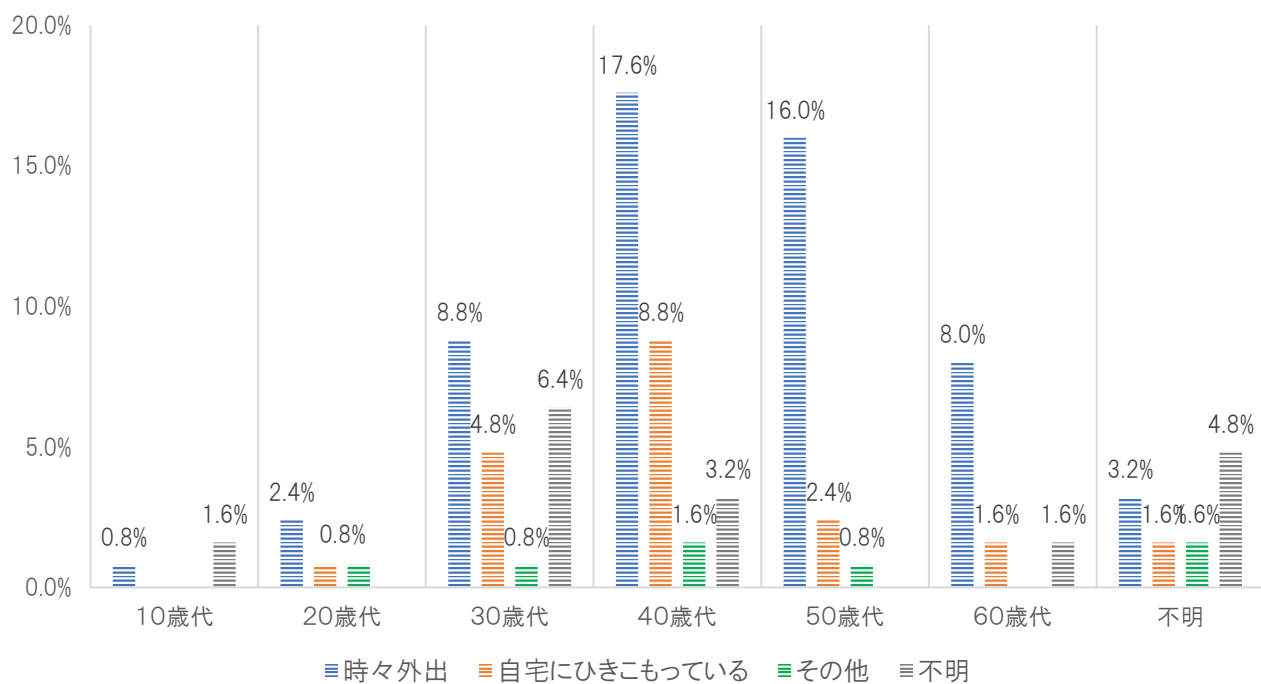


		合計	時々外出	外出しない	その他	不明
全体		125	71	25	7	22
性別	男性	78	47	15	12	4
	女性	43	23	10	8	2
	不明	4	1	0	2	1
家族状況	一人暮らし	18	13	1	3	1
	同居家族あり	104	58	23	17	6
	不明	3	0	1	2	0
年齢階級別	10 歳代	3	1	0	2	0
	20 歳代	5	3	1	0	1
	30 歳代	26	11	6	8	1
	40 歳代	39	22	11	4	2
	50 歳代	24	20	3	0	1
	60 歳代	14	10	2	2	0
	不明	14	4	2	6	2

- ・家族状況と合わせてみると、同居家族があり、時々外出している人が58人と最も多かった。
- ・一人暮らしで自宅にひきこもっている状態の該当者は1名であった。
- ・男性・女性ともに買い物程度の外出はしている。ウィークデイの日中に生産年齢世代の男性が目撃されることで、「いつも家にいる」と認識されてしまう。
- ・自宅に引きこもっている状態にある方(外出しない)は、40歳代・30歳代が多く、男性が女性の1.4倍になっている。そのほとんどが家族と同居しており、家族のサポートを受けて生活している。



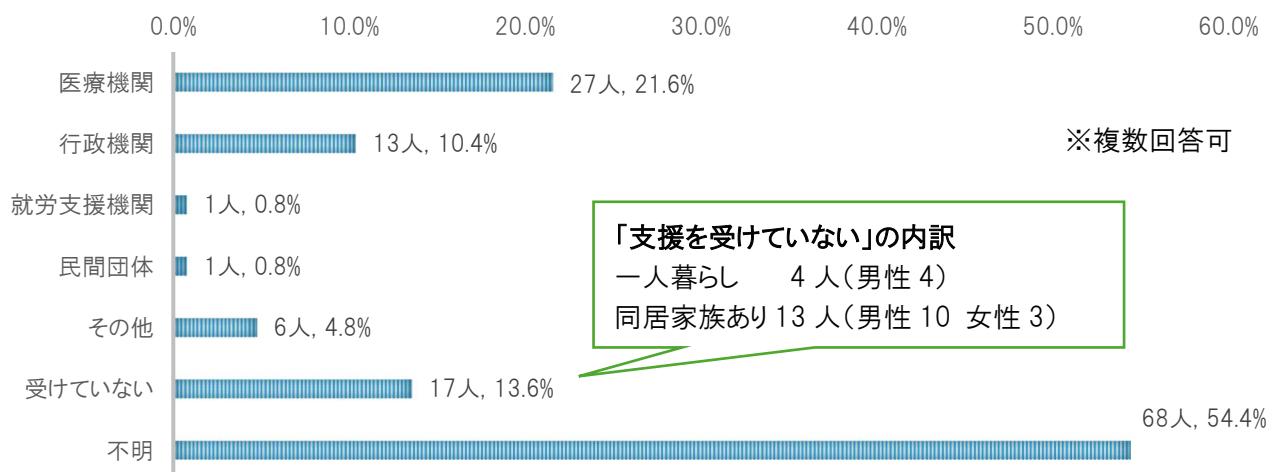
## 外出状況（年代割合）



## 5. 支援の有無と受けている支援の種類

該当者の半数以上は、支援を受けているのかどうか不明であった。

「不明」、「受けていない」を除く支援を受けている 48 人の中では、医療機関、行政機関からの支援を受けているケースが多かった。「その他」として、市の保健師や地域包括支援センターからの支援を受けているという回答が多かった。



		合計	医療機関	行政機関	就労支援機関	民間団体	その他	受けていない	不明
全体		125	27	13	1	1	6	17	68
性別	男性	78	16	8	1	1	4	14	41
	女性	43	11	4	0	0	2	3	24
	不明	4	0	1	0	0	0	0	3
家族状況	一人暮らし	18	3	2	0	1	0	4	8
	同居家族あり	104	24	11	1	0	6	13	57
	不明	3	0	0	0	0	0	0	3
年齢階級別	10 歳代	3	0	0	0	0	0	0	3
	20 歳代	5	1	0	0	0	0	1	3
	30 歳代	26	4	3	1	0	0	1	18
	40 歳代	39	6	6	0	0	3	8	17
	50 歳代	24	7	3	0	0	2	5	10
	60 歳代	14	7	1	0	1	0	2	6
	不明	14	2	0	0	0	1	0	11

※支援内容であり複数回答あり

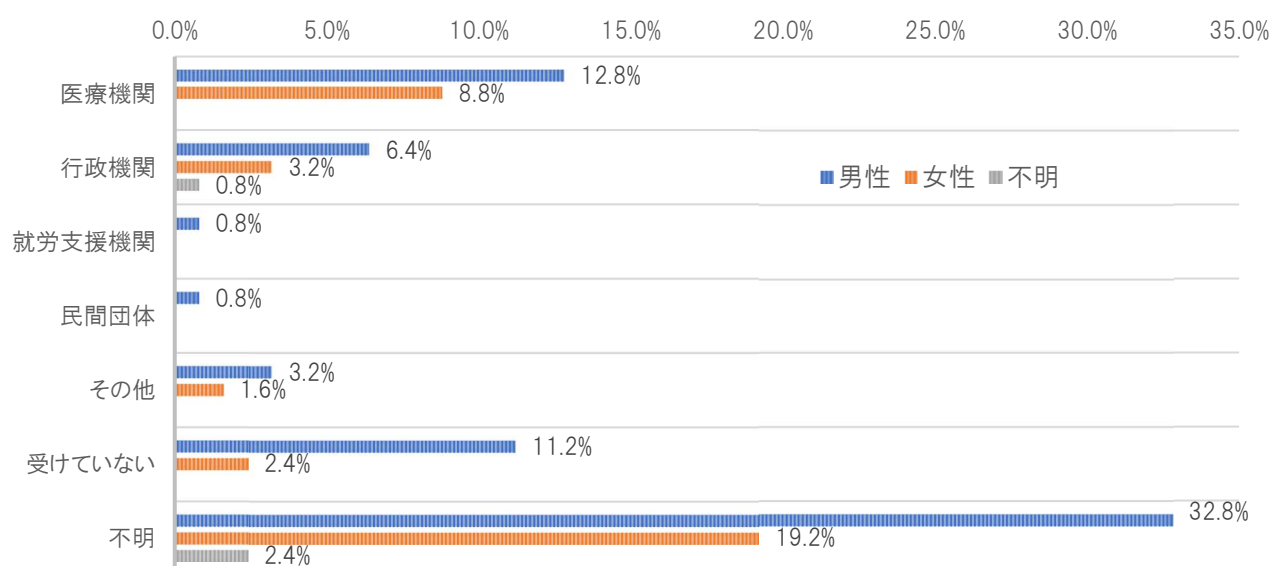
家族状況と合わせて見ると、一人暮らしで支援を受けていない該当者が 4 人いることが分かった。同居家族がいる場合に比べ、一人暮らしの方が支援につながりにくい傾向が見られた。

支援内容「不明」とされた 68 人の内訳は、男性が 41 人(60.3%)と多く、女性が 24 人(35.3%)であり、男性の方が生活状況を把握しづらい状況にある。この 68 人のうち 57 人が家族と同居しているが、支援状況が不明ということは、周囲に相談しづらい傾向にあることが窺える。

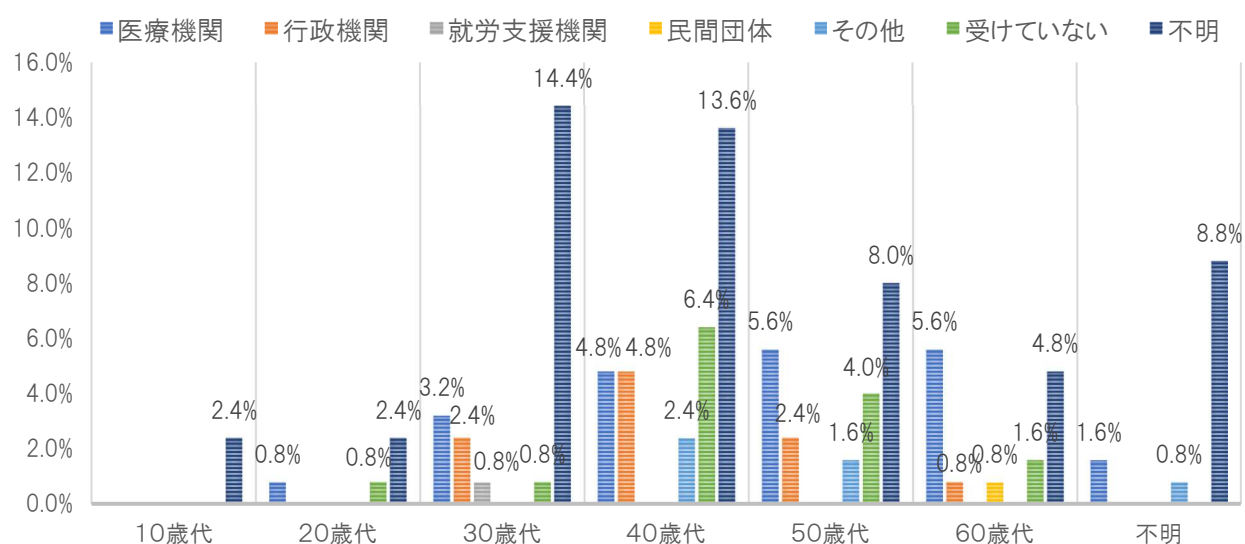
### 支援状況「不明」を除いた家庭状況

	合計	支援を受けている 該当者の割合	支援を受けていない 該当者の割合
一人暮らし	10	60.0% ( 6/10)	40.0% ( 4/10)
同居家族あり	55	76.4% (42/55)	23.6% (13/55)

### 受けている支援の男女比（複数回答可）

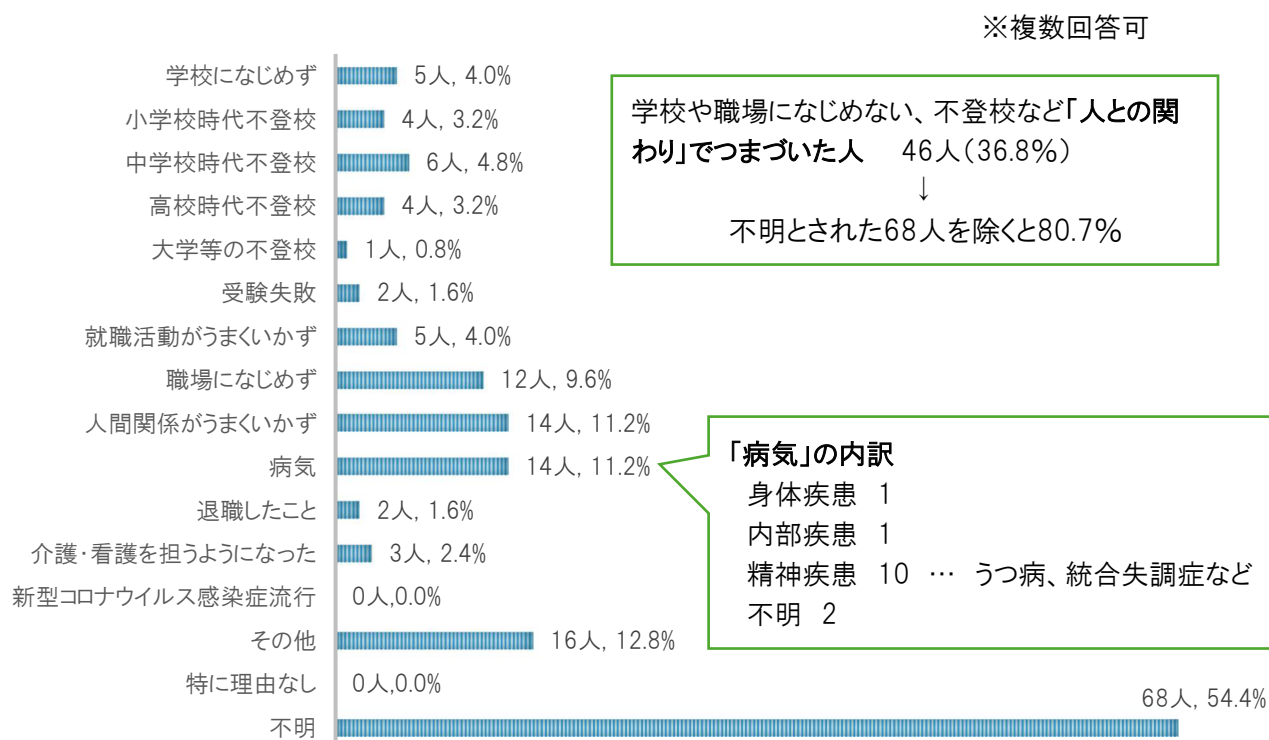


### 年代ごとの受けている支援（複数回答可）



支援を受けている人は、40代、50代、30代の順に多くなっており、支援機関につながるも、世間的には就労し、日中在家しない状況にならないといつまでも「ひきこもりの人」として認識されてしまいがちである。

## 6. ひきこもりに至った経緯

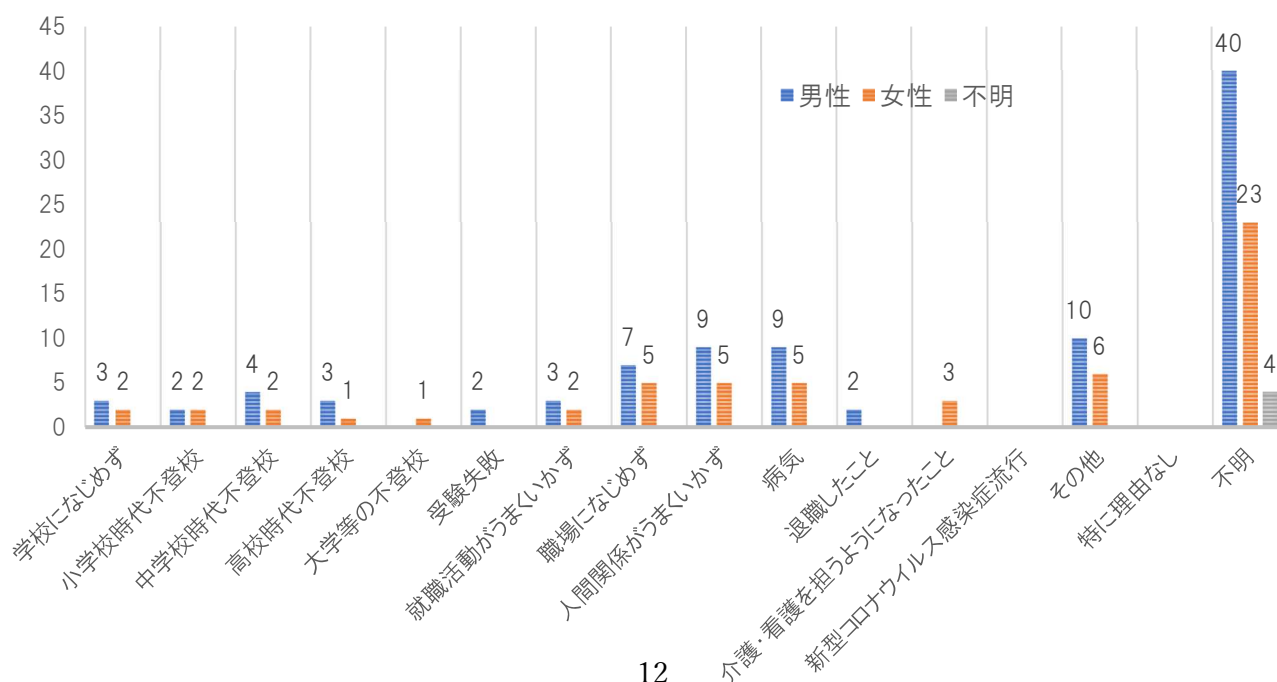


該当者の半数以上はひきこもりに至った経緯が不明であるが、「人間関係がうまくいかなかったこと」や「病気」がきっかけになったという回答がそれぞれ11.2%と多かった。

病名としては「うつ病」等精神疾患が多く挙げられた。

不登校について、小学校から大学までの回答を合わせると15人となっており、「就職活動がうまくいかなかった」、「職場になじめなかった」という回答の合計は17人となっている。

ひきこもりに至った経緯の男女比（複数回答可）



		合計	学校に なじめず	小学校 不登校	中学校 不登校	高校 不登校	大学等 不登校	受験 失敗	就職 活動	職場に なじめず
全体		125	5	4	6	4	1	2	5	12
性別	男性	78	3	2	4	3	0	2	3	7
	女性	43	2	2	2	1	1	0	2	5
	不明	4	0	0	0	0	0	0	0	0
家族 状況	一人暮らし	18	0	0	0	0	0	0	0	1
	同居家族あり	104	5	4	6	4	1	2	5	11
	不明	3	0	0	0	0	0	0	0	0
年齢 階級別	10 歳代	3	1	2	2	1	0	0	0	0
	20 歳代	5	0	0	1	1	0	0	0	0
	30 歳代	26	1	0	1	0	0	0	0	2
	40 歳代	39	2	2	2	1	1	2	4	4
	50 歳代	24	1	0	0	1	0	0	0	5
	60 歳代	14	0	0	0	0	0	0	1	1
	不明	14	0	0	0	0	0	0	0	0

		合計	人間 関係	病気	退職	介護・看 護のため	新型 コロナ	その他*	理由 なし	不明
全体		125	14	14	2	3	0	16	0	68
性別	男性	78	9	9	2	0	0	10	0	41
	女性	43	5	5	0	3	0	6	0	23
	不明	4	0	0	0	0	0	0	0	4
家族 状況	一人暮らし	18	1	1	0	0	0	4	0	10
	同居家族あり	104	13	13	2	2	0	12	0	56
	不明	3	0	0	0	1	0	0	0	2
年齢 階級別	10 歳代	3	0	0	0	0	0	0	0	1
	20 歳代	5	1	1	0	0	0	0	0	2
	30 歳代	26	2	2	0	0	0	0	0	19
	40 歳代	39	4	2	2	0	0	9	0	18
	50 歳代	24	5	6	0	2	0	5	0	9
	60 歳代	14	2	2	0	0	0	1	0	8
	不明	14	0	1	0	1	0	1	0	11

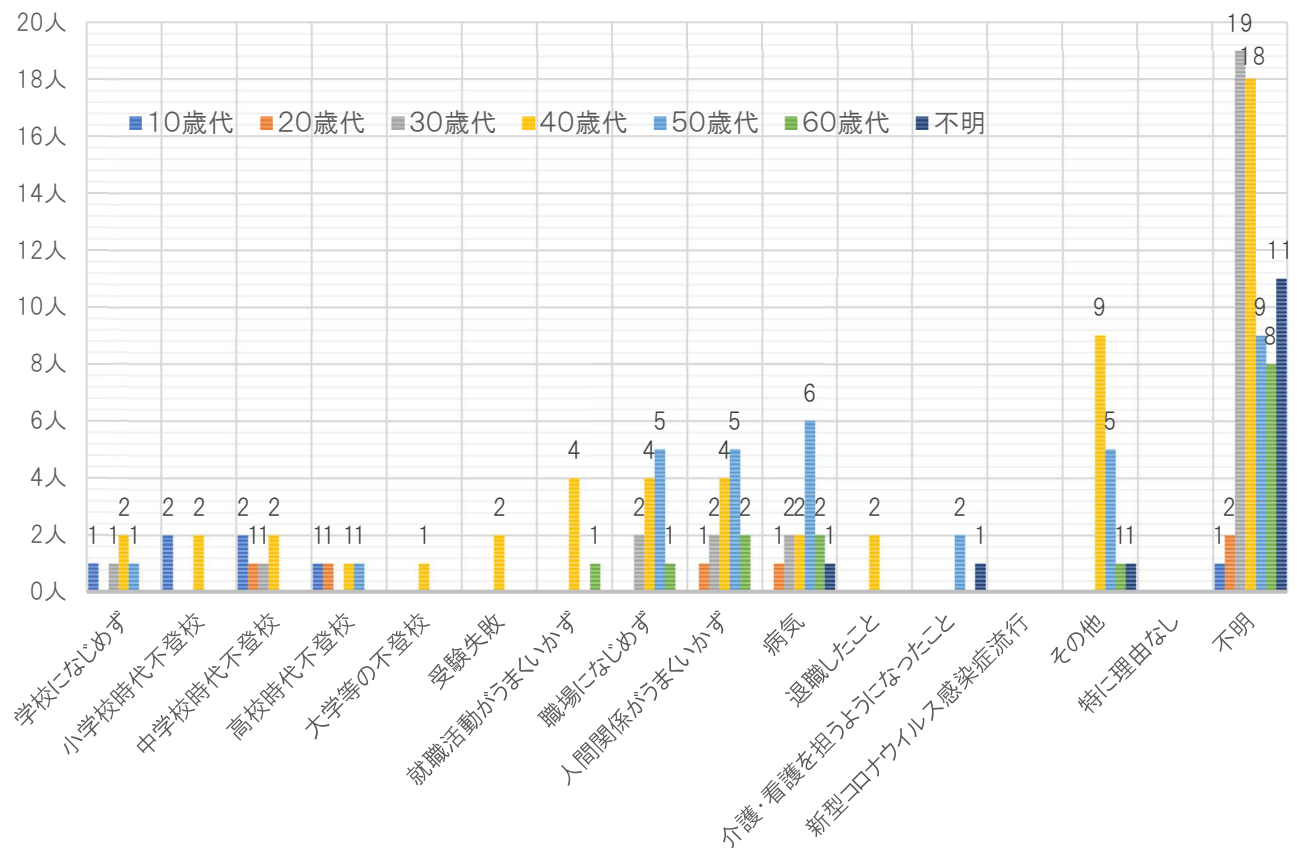
※複数回答あり

その他\* : 離婚、家族関係、(家族との不和、暴力)、流産、交通事故、怪我など

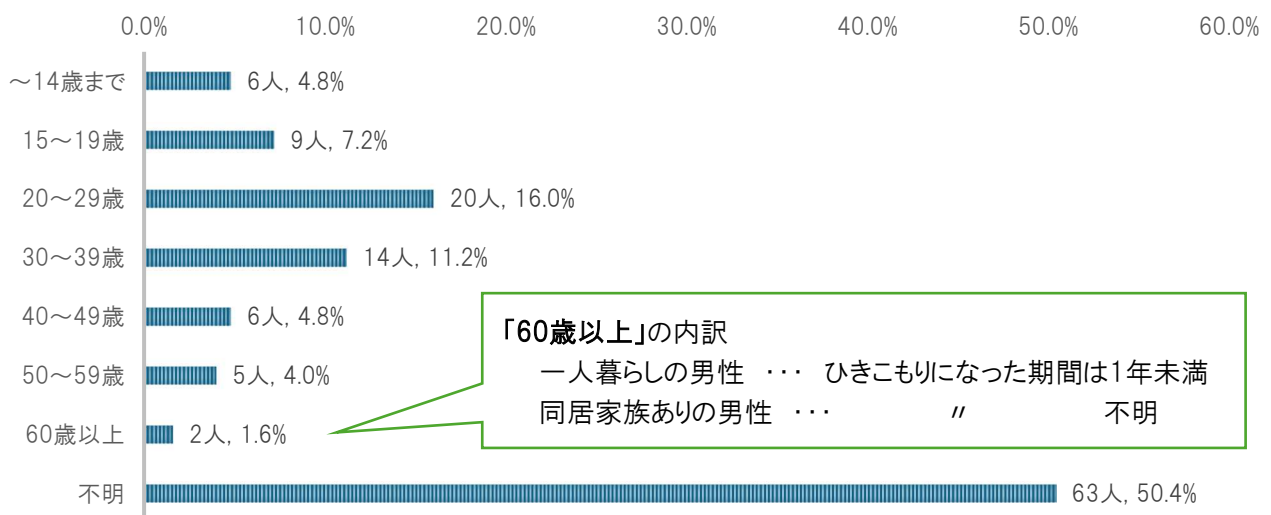
若い年代は不登校歴が把握できている。人間関係や職場での不適應は 40 歳代、50 歳代に多く、年代的に発達障がい気づかれず大人になり、失敗を繰り返し傷付いたケースも多いと推測される。

病気理由が 50 歳代に多いが、失敗を繰り返した結果、うつ病など精神疾患を患ったものと推測される。

## ひきこもりに至った経緯（年代別）

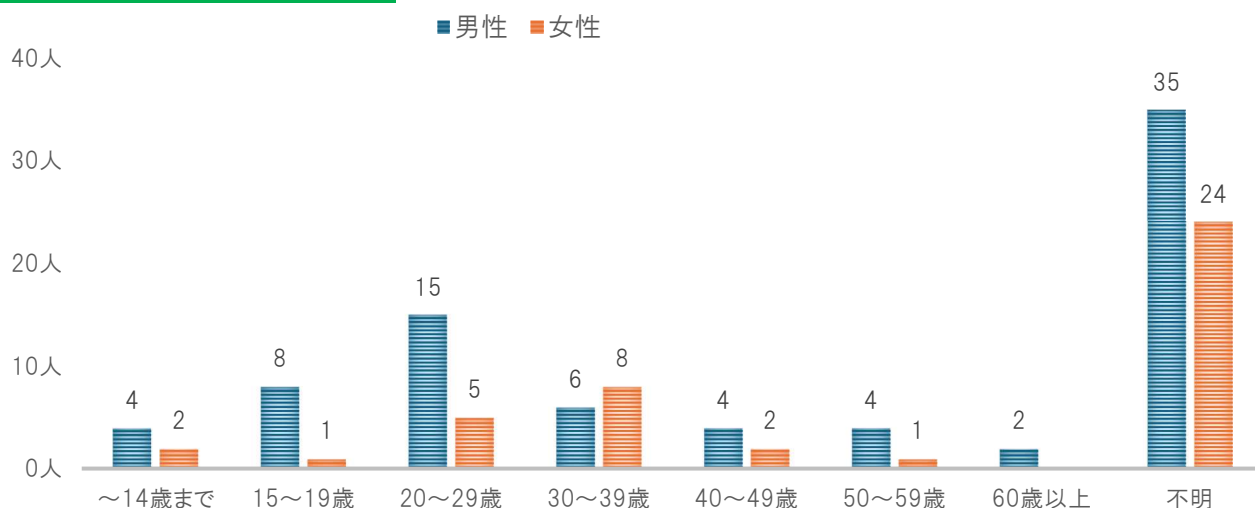


## 7. ひきこもりになった年齢



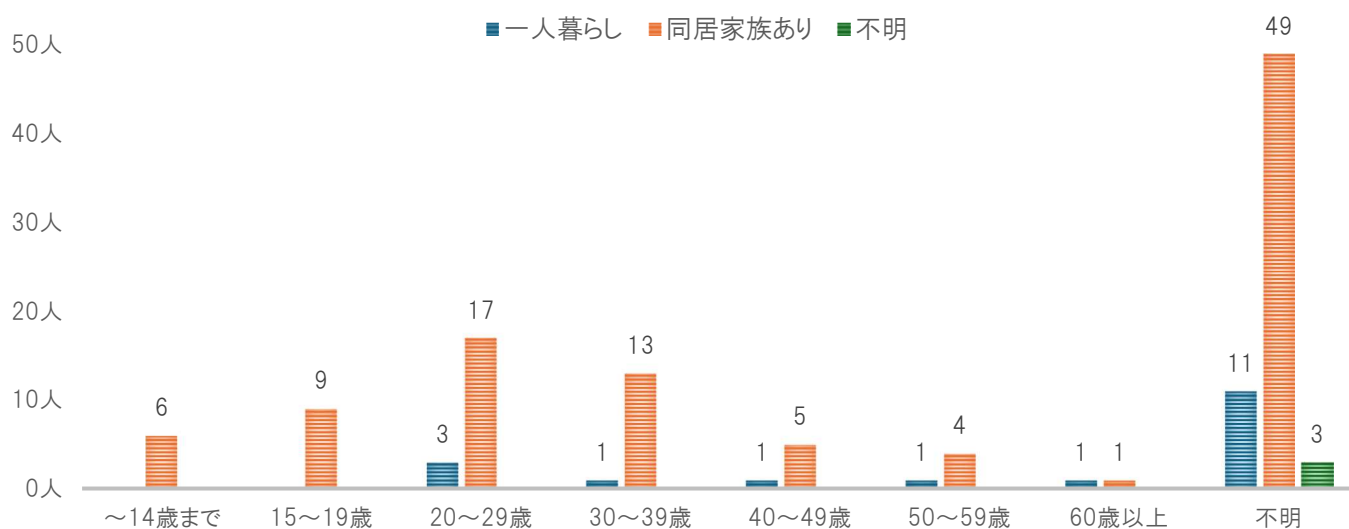
「不明」である該当者を除くと、「20～29歳（20人）」、「30～39歳（14人）」の順に多かった。

### ひきこもりになった年齢の男女比



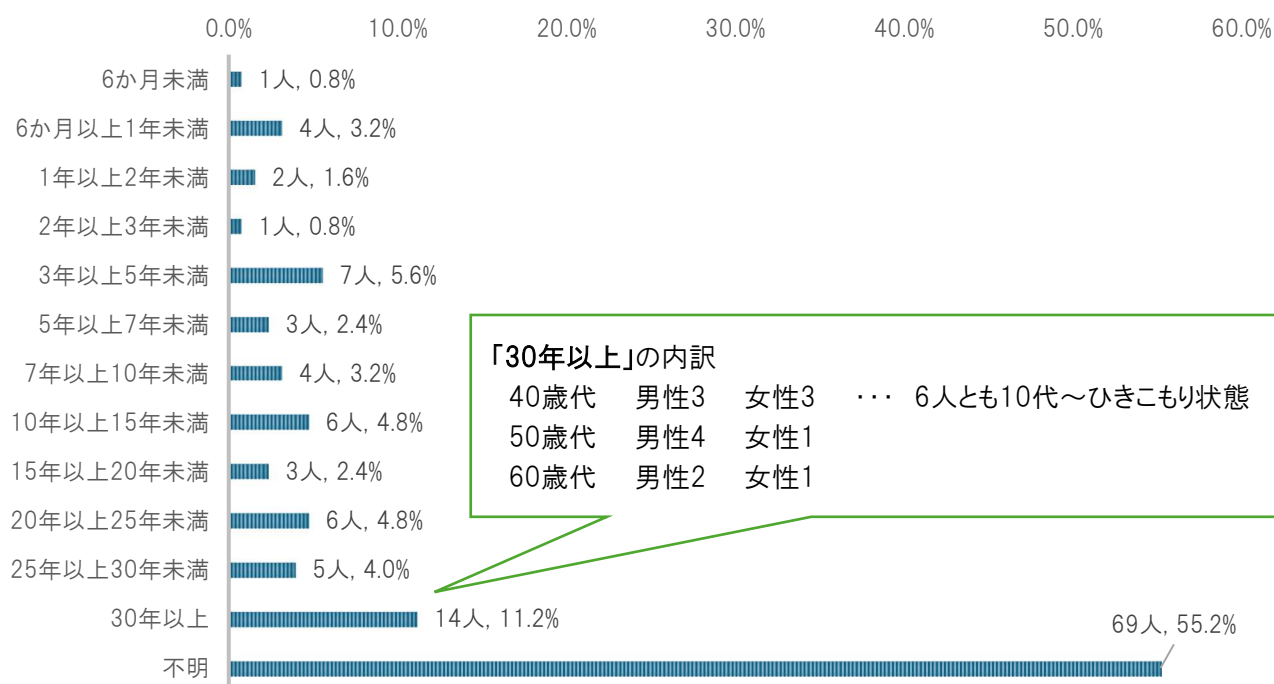
不明(63人)を除くと、男性は20～29歳が15人、15～19歳が8人と多く、女性は30～39歳が8人、20～29歳が5人と多かった。

### ひきこもりになった年齢と家族状況



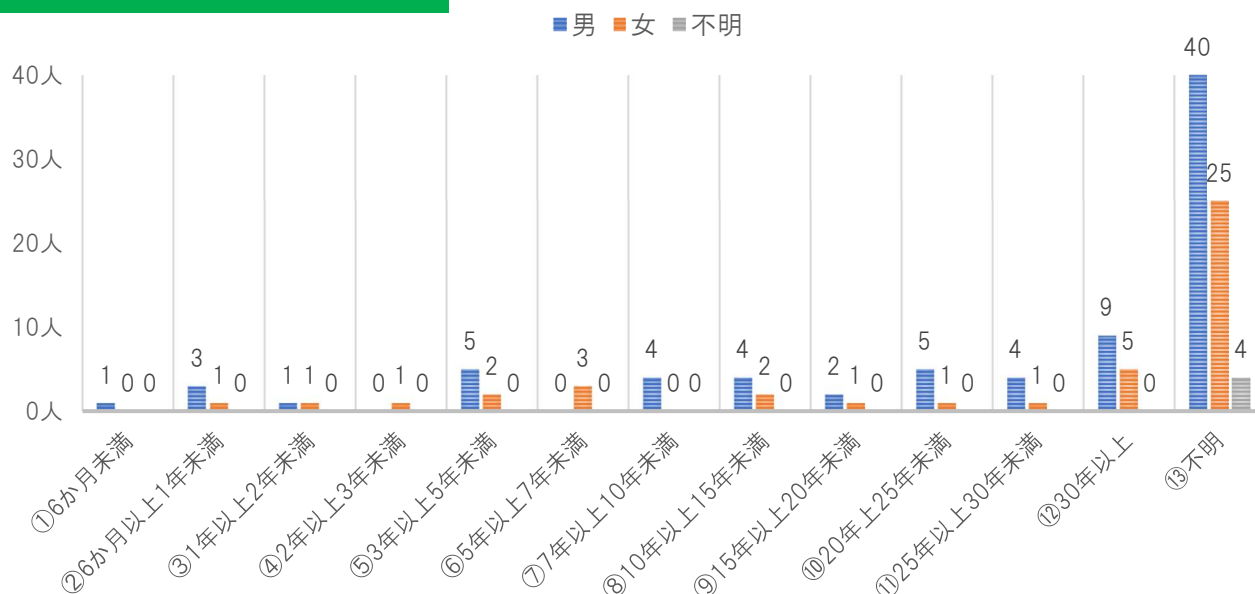
		合計	～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	不明
全体		125	6	9	20	14	6	5	2	63
性別	男性	78	4	8	15	6	4	4	2	35
	女性	43	2	1	5	8	2	1	0	24
	不明	4	0	0	0	0	0	0	0	4
家族状況	一人暮らし	18	0	0	3	1	1	1	1	11
	同居家族あり	104	6	9	17	13	5	4	1	49
	不明	3	0	0	0	0	0	0	0	3

## 8. ひきこもり状態にある期間



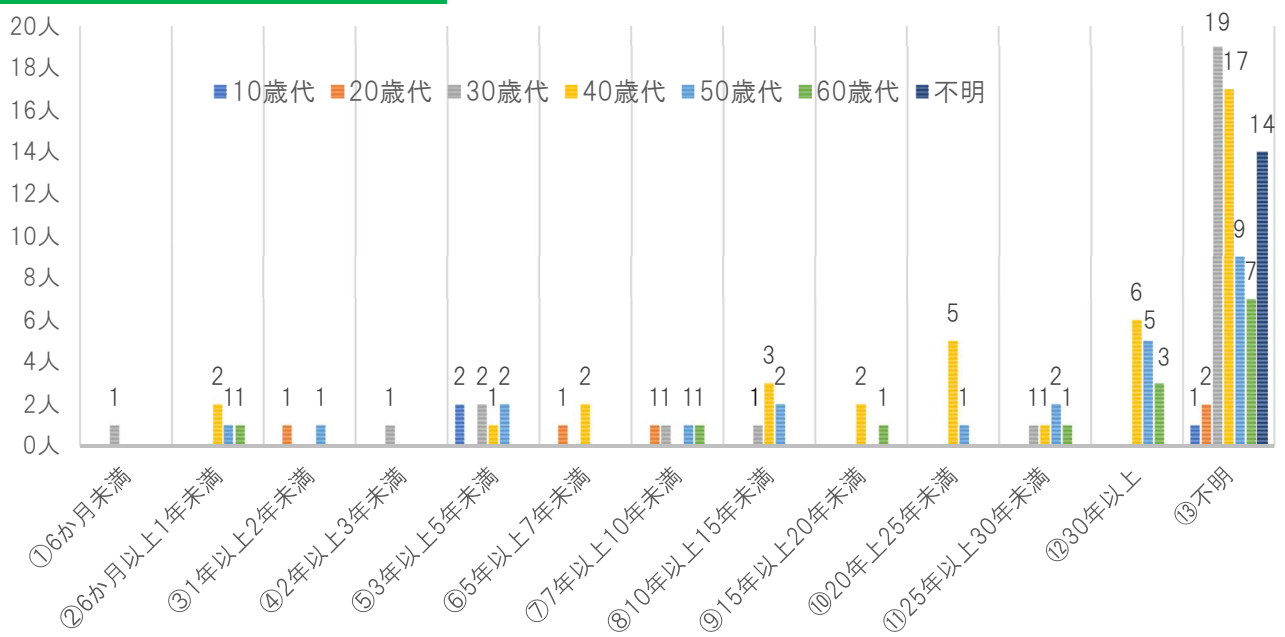
ひきこもり状態にある期間については、「不明」以外だと「30年以上」の人が最も多く、14人であった。「不明」である該当者を除くと、「10年以上」の該当者が60.7%（34/56）と過半数を占めている。

### ひきこもり状態にある期間（男女比）

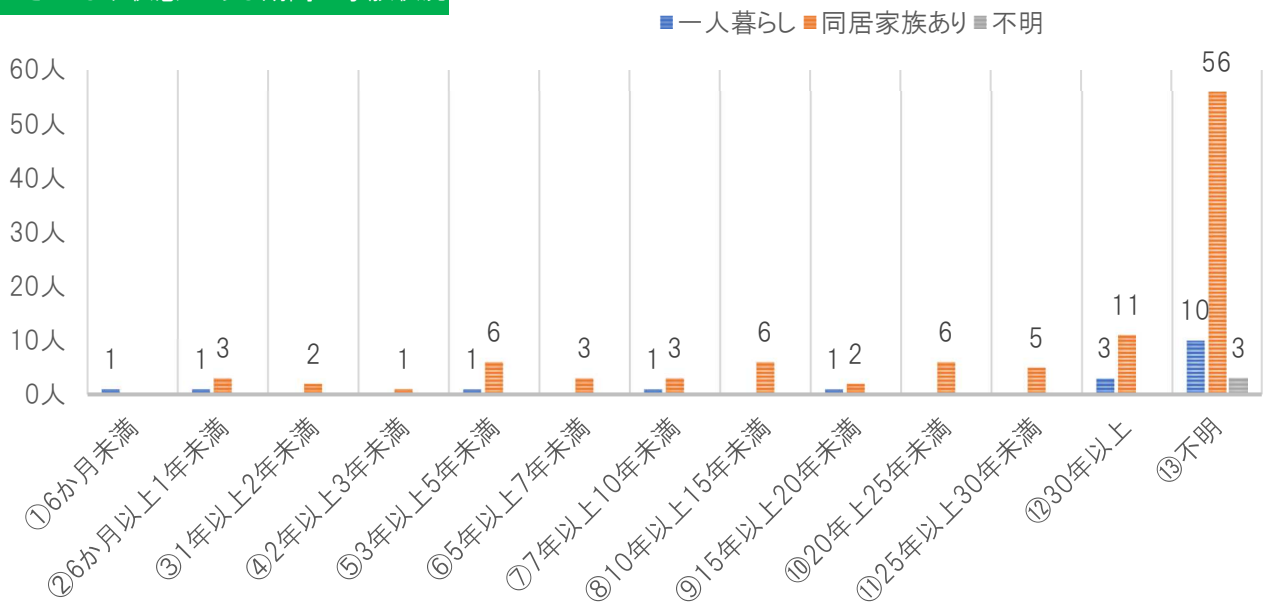




### ひきこもり状態にある期間（年代別）



### ひきこもり状態にある期間と家族状況

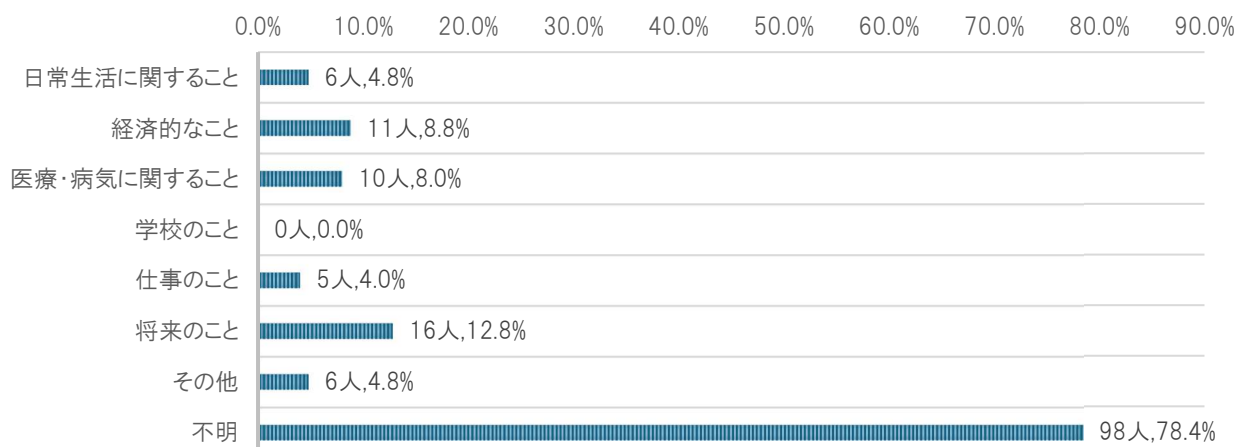


		合計	6か月未満	6か月以上 1年未満	1年以上 2年未満	2年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 7年未満	7年以上 10年未満
全体		125	1	4	2	1	7	3	4
性別	男性	78	1	3	1	0	5	0	4
	女性	43	0	1	1	1	2	3	0
	不明	4	0	0	0	0	0	0	0
家族 状況	一人暮らし	18	1	1	0	0	1	0	1
	同居家族あり	104	0	3	2	1	6	3	3
	不明	3	0	0	0	0	0	0	0
年齢 階級別	10歳代	3	0	0	0	0	2	0	0
	20歳代	5	0	0	1	0	0	1	1
	30歳代	26	1	0	0	1	2	0	1
	40歳代	39	0	2	0	0	1	2	0
	50歳代	24	0	1	1	0	2	0	1
	60歳代	14	0	1	0	0	0	0	1
	不明	14	0	0	0	0	0	0	0

		合計	10年以上 15年未満	15年以上 20年未満	20年以上 25年未満	25年以上 30年未満	30年以上	不明
全体		125	6	3	6	5	14	69
性別	男性	78	4	2	5	4	9	40
	女性	43	2	1	1	1	5	25
	不明	4	0	0	0	0	0	4
家族 状況	一人暮らし	18	0	1	0	0	3	10
	同居家族あり	104	6	2	6	5	11	56
	不明	3	0	0	0	0	0	3
年齢 階級別	10歳代	3	0	0	0	0	0	1
	20歳代	5	0	0	0	0	0	2
	30歳代	26	1	0	0	1	0	19
	40歳代	39	3	2	5	1	6	17
	50歳代	24	2	0	1	2	5	9
	60歳代	14	0	1	0	1	3	7
	不明	14	0	0	0	0	0	14

30年以上の14人のうち、8人が10代からのひきこもり(不登校)状態である。不登校が今ほど理解されず、必要な支援が入らないまま長期ひきこもりになってしまったと推測される。

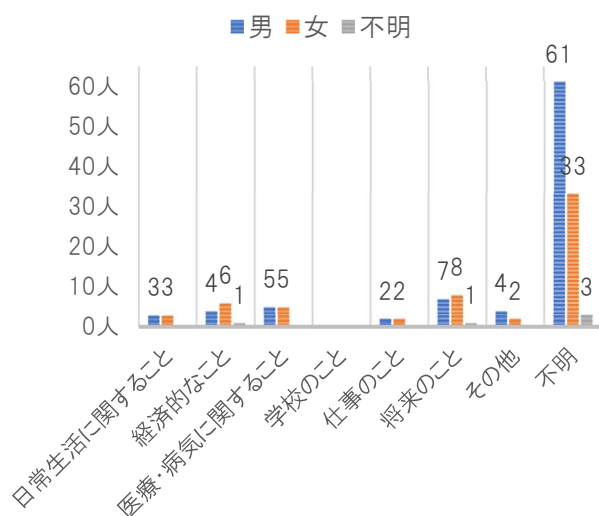
## 9. 本人が困っていること



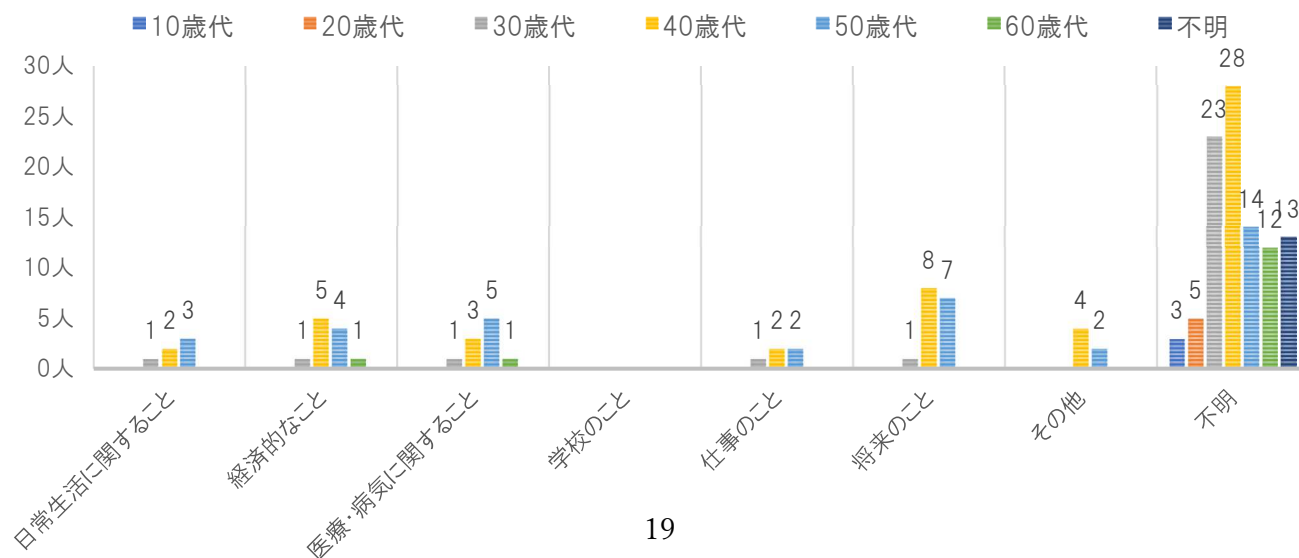
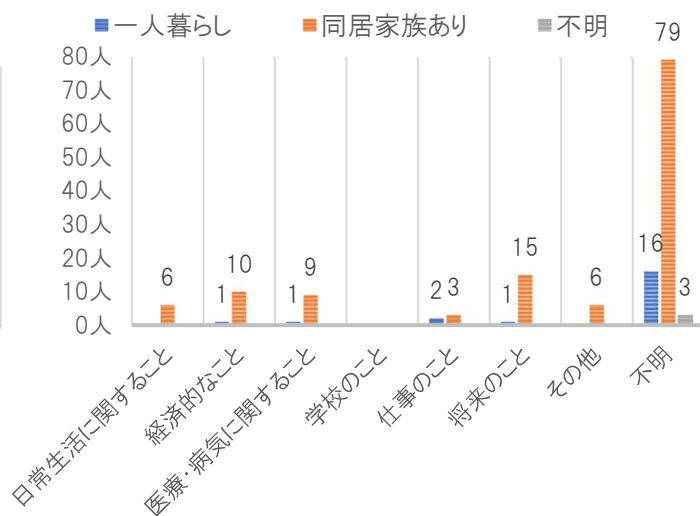
「不明」を除けば、「将来のこと」に困っているという回答が最も多かった。

「その他」として、「本人は困っていないが親が困っている」、「母親との関係が良くない」といったことが挙げられていた。

### 本人が困っていること（男女比）



### 本人が困っていること（家族状況別）

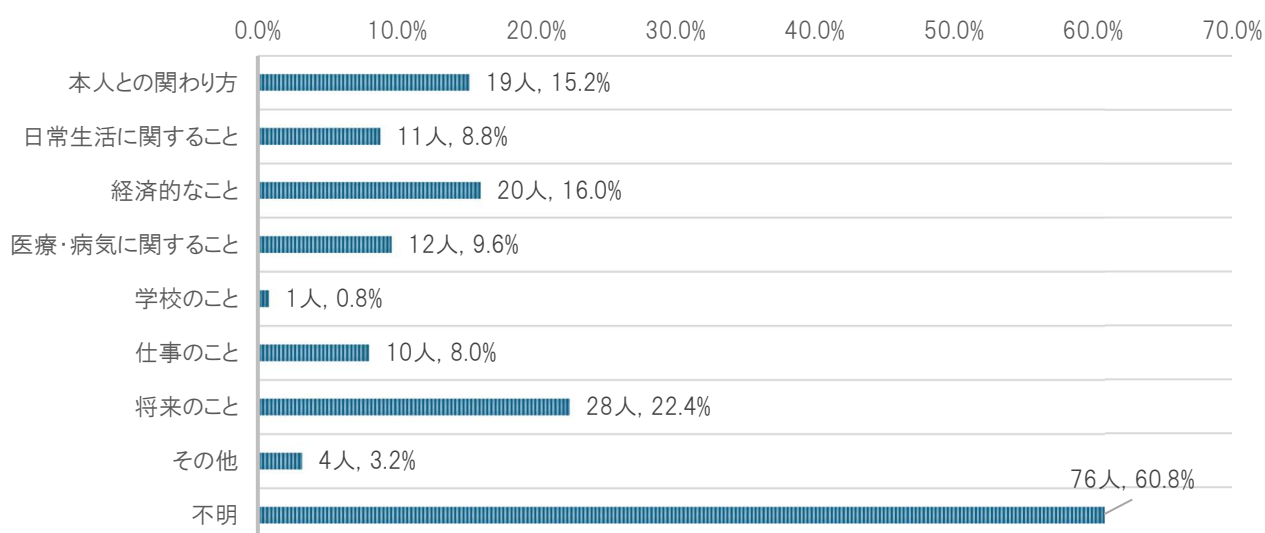


		合計	日常生活	経済的	医療・病気	学校	仕事	将来	その他	不明
全体		125	6	11	10	0	5	16	6	98
性別	男性	78	3	4	5	0	2	7	4	61
	女性	43	3	6	5	0	2	8	2	33
	不明	4	0	1	0	0	0	1	0	3
家族状況	一人暮らし	18	0	1	1	0	2	1	0	16
	同居家族あり	104	6	10	9	0	3	15	6	79
	不明	3	0	0	0	0	0	0	0	3
年齢階級別	10 歳代	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	20 歳代	5	0	0	0	0	0	0	0	5
	30 歳代	26	1	1	1	0	1	1	0	23
	40 歳代	39	2	5	3	0	2	8	4	28
	50 歳代	24	3	4	5	0	2	7	2	14
	60 歳代	14	0	1	1	0	0	0	0	12
	不明	14	0	0	0	0	0	0	0	13

※複数回答あり

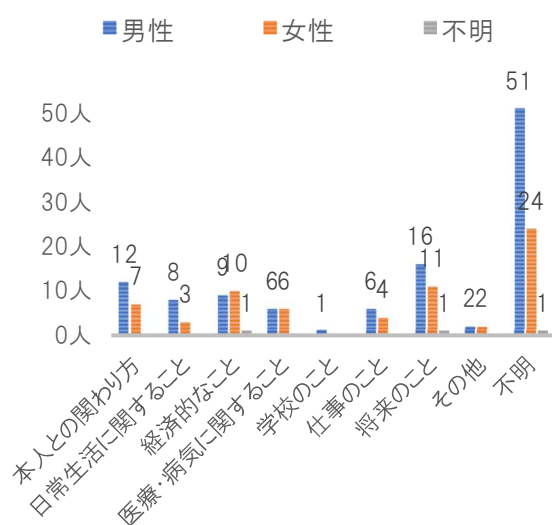
- ・不明(98 人)を除くと、「将来のこと」が 16 人(男性 7 人、女性 9 人)で、親亡き後が想像できる 40 歳・50 歳代の 93.8%(15 人)を占めた。
- ・10 歳代、20 歳代については、直接本人と会話ができていないためか全員が「不明」となっていた。地域支援の中で若い年代の本人とつながることは難しい。
- ・不明以外の回答は、40 歳代と 50 歳代が占めている。困っていることを調査票作成者(地域支援者)に吐露できる年代であり、年代的に「将来のこと」、「経済的なこと」、「医療・病気に関すること」と続いている。

## 10. 家族が困っていること

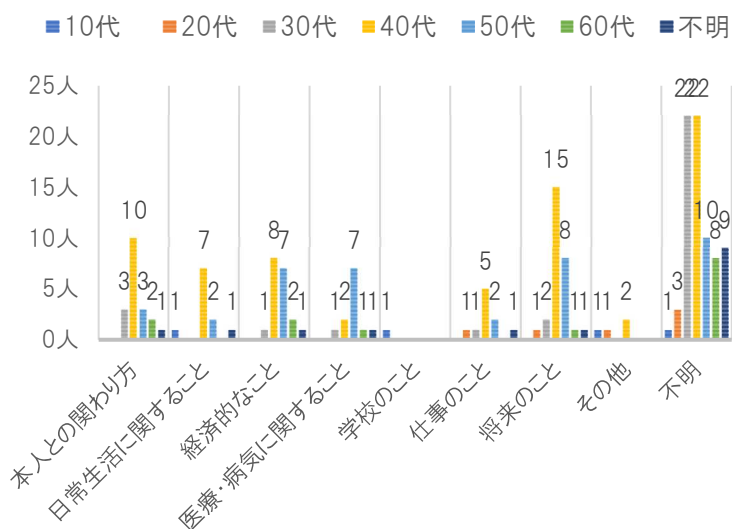


本人が困っていることと同様に、「不明」を除けば、「将来のこと」に困っているという回答が最も多かった。「その他」として、「家族が困ることをする」、「家事や通院介助をしてもらい助かっている」など回答があった。

## 家族が困っていること（男女比）



## 家族が困っていること（年代別）

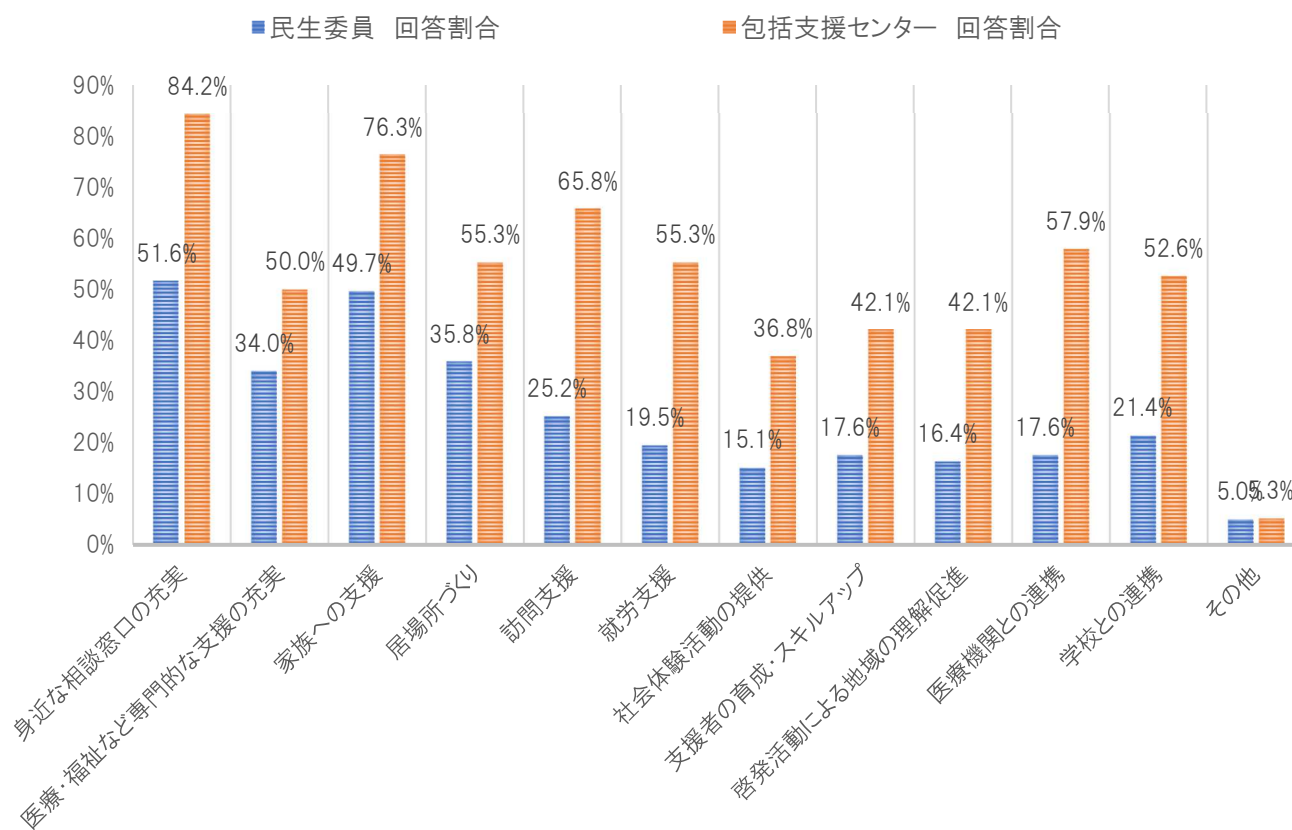
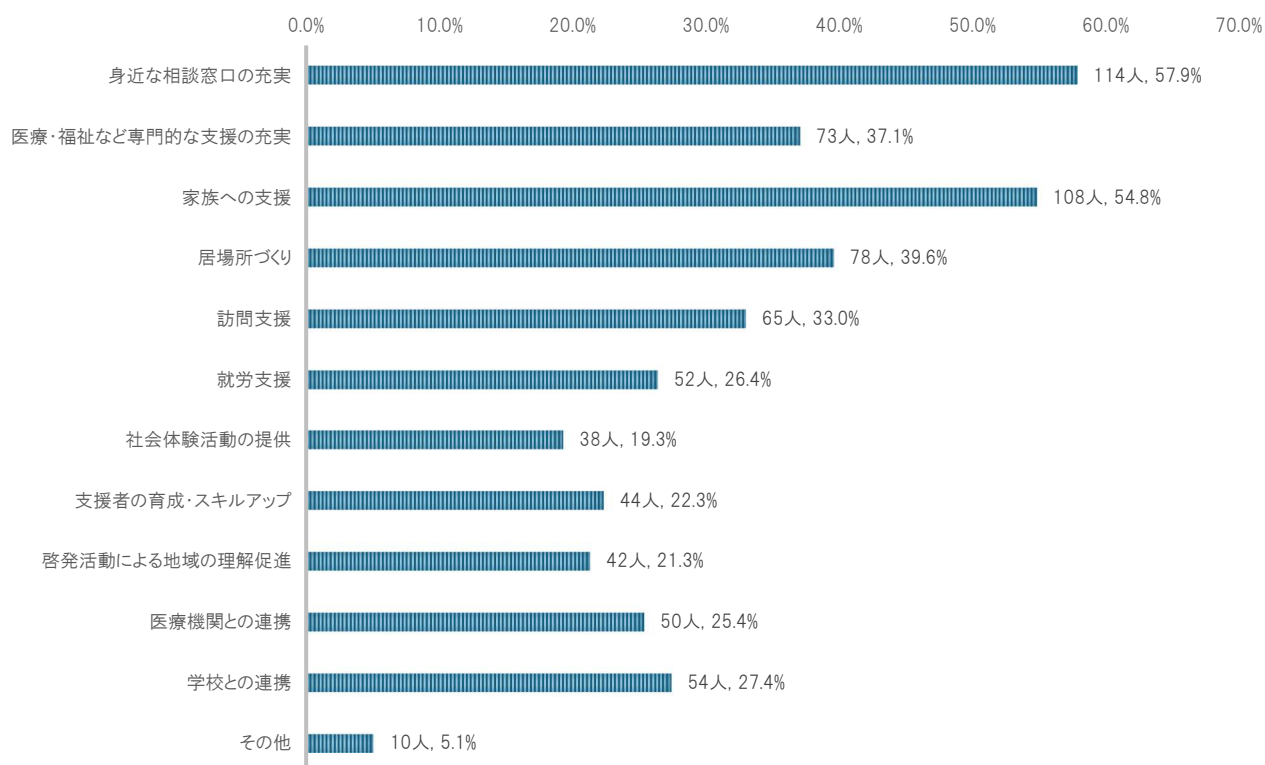


		合計	本人関わり方	日常生活	経済的	医療・病気	学校	仕事	将来	その他	不明
全体		125	19	11	20	12	1	10	28	4	76
性別	男性	78	12	8	9	6	1	6	16	2	51
	女性	43	7	3	10	6	0	4	11	2	24
	不明	4	0	0	1	0	0	0	1	0	1
家族状況	一人暮らし	18	1	0	1	0	0	0	1	0	13
	同居家族あり	104	18	11	19	12	1	10	27	4	60
	不明	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
年齢階級別	10 歳代	3	0	1	0	0	1	0	0	1	1
	20 歳代	5	0	0	0	0	0	1	1	1	3
	30 歳代	26	3	0	1	1	0	1	2	0	22
	40 歳代	39	10	7	8	2	0	5	15	2	22
	50 歳代	24	3	2	7	7	0	2	8	0	10
	60 歳代	14	2	0	2	1	0	0	1	0	8
	不明	14	1	1	1	1	0	1	1	0	9

※複数回答あり

- ・40 歳代・50 歳代の家族が「将来のこと」を選択しており、男女ともにこの年代が多かった。
- ・「経済的なこと」「医療・病気に関する事」は、50 歳代を中心に高い年齢層が多かった。
- ・10 歳代、20 歳代は親も若く、現役で働いている家庭が多いため、核家族の場合には民生委員等と関わる機会が少ない。

## 11. ひきこもり支援として必要だと思うこと



ひきこもり支援として必要だと思うこと	民生委員	包括支援センター	民生委員 回答割合	包括支援センター 回答割合
身近な相談窓口の充実	82	32	51.6%	84.2%
医療・福祉など専門的な支援の充実	54	19	34.0%	50.0%
家族への支援	79	29	49.7%	76.3%
居場所づくり	57	21	35.8%	55.3%
訪問支援	40	25	25.2%	65.8%
就労支援	31	21	19.5%	55.3%
社会体験活動の提供	24	14	15.1%	36.8%
支援者の育成・スキルアップ	28	16	17.6%	42.1%
啓発活動による地域の理解促進	26	16	16.4%	42.1%
医療機関との連携	28	22	17.6%	57.9%
学校との連携	34	20	21.4%	52.6%
その他	8	2	5.0%	5.3%

「身近な相談窓口の充実」、「家族への支援」がそれぞれ5割を超えていた。

「その他」の意見の中で、相談窓口のあり方について以下のような意見があった。

- ・ 相談窓口をもっと市民から知ってもらう工夫や広報の仕方の工夫。
- ・ ケースによって様々になるが、気軽に相談できる環境・雰囲気。

「その他」として、他に以下の意見があった。

- ・ 個々の対応が違い、支援の仕方も違うと思っている。
- ・ ひきこもり状態にある状況にある人を正確に把握すること。行政の仕事。
- ・ 本人への直接的なカウンセリング。困っていることはないか、また、これからどのように暮らしていきたいのか等
- ・ 学校教育のあり方。幼少期からのサポート体制（子育て支援）。特に発達障害の親子の支援。
- ・ 複雑に問題が絡み合っている状況を想定した間口を広げた支援方法
- ・ 責任を持ち持続的かつ長期的に関わる機関（異動等で支援が途切れない）

## 課題と今後の方向性

・男女比はおよそ2：1となっているが、全国調査では女性の割合の増加が指摘されているため、今後とも動向を注視する。

・40歳代以上の該当者が多い。40、50歳代になっても支援に繋がっていないため、ひきこもり状態にあることは、顕在化しにくいことがわかる。

また、回答内容の多くが「不明」である。ひきこもり状態にあることやその方の生活状況が周囲に伝わりにくく、地域で孤立している状況が伺える。

・ひきこもり状態にある期間が「不明」である該当者を除くと、10年以上の該当者が6割を超えている。長期化しやすい傾向があるため、早期からの支援、介入が重要である。

・同居家族がいてもひきこもり状態となっているケースが多いことから、精神的な孤立が、望まない孤独を生じさせていることが伺われる。

・不登校経験者が一定数いることから、ひきこもりと不登校は親和性が高いことがわかる。若年層の支援が重要である。

・「本人が困っていること」と「家族が困っていること」を見ると、本人と家族の思いは必ずしも一致していないことがわかる。本人や家族の希望を確認するインテークが重要であり、本人の意思に沿った支援が必要である。

・「ひきこもり支援に必要と考える取組」に関しては、「身近な相談窓口の充実」が「医療・福祉など専門的な支援の充実」と比べ多くの回答があった。このことから、ひきこもり支援では、相談につながりにくいという課題を感じている方が多く、相談しやすい窓口の存在が求められていると言える。

**相談窓口、事業の更なる周知が重要であるとともに、ひきこもりに関する啓発（社会全体の課題であること、行政と民間事業者、地域の連携が必要であること）を継続し行う必要がある。**